

# オール電化・雨月物語

青柳碧人

アオズキン

1、

倉野内ひとみくらのうちのが一人の後輩男子を連れて職員室に押しかけてきたのは、九月三十日の放課後だった。

「先生、先生、先生！ 遠藤先生っ！」えんどう

大きな声を上げながら重利しげとしの机にまっしぐらにやってくる、倉野内は右手の人差し指をつきつけた。

「二年C組、倉野内です。約束通り、先生のお話をうかがいに来ました」

遠藤は思わず目を背けるそむ。その視線の先に、倉野内は回り込んでくる。

「あれ、先生、まさか約束を反故ほじにするつもりじゃありませんよね。二週間前、取材を申し込んだときおっしゃいましたよ。今度の物理のテストで私が九十点以上を取ったら、先生のとっておきの体験談

を教えてください」と

倉野内は、新聞部に所属する生徒である。この学校の新聞部は隔月で学校新聞を発行しているが、今回、倉野内のチームは「怪奇特集」を組むという話になったらしい。教師の怪奇体験を記事にしようと倉野内は片っ端から聞き込みを開始した。重利のところにも来たが、そんな話はないと強硬な態度を取って追い払った。

ところが、その翌日もまた彼女はやってきた。にやにやしながら、「品田先生しなだに聞きましたよ、遠藤先生、とつても不可解な経験をしたことがあるそうじゃないですかあ」と迫ってきた。

実際、重利は大学院時代、忘れられない不可解な経験をしている。物理学の教師という立場上、そういうオカルトめいた話は普段しないようにしているのだが、いつか酒の席で、同期の現代文教師、品田には話してしまったことがあった。

後悔してもしょうがない。重利は知らないふりをした。だが倉野内はしつこかった。そこで、前期末テストの約束を交わしたのだった。倉野内は授業中、ほとんどの時間を隣の席の友人とのおしゃべりで費つやしているような生徒だ。これまでの成績を見ても、到底九十点などとれるはずがないと高をくくっていた。

結果——九十二点。

そのテストを、今日の三時限目に倉野内のクラスで返却したばかり

りだった。

「確認だが、カンニングなどしていないだろうな」

「失礼な！ 私は死に物狂いで勉強したんです。ホオズキにカテキョについてもらって」

と、一緒についてきた坊主頭の男子生徒を振り返る。彼はひよこつとお辞儀をしたあとで、デジタルカメラを構えた。

「新聞部の一年生、小月慎太郎<sup>おづきしんたろう</sup>。物理はすごい得意で、今の段階で国立大学の入試も解けるくらいです」

紹介された彼はひよこりと頭を下げた。一年生の授業は受け持っていないので、知らない顔だった。

「今日は写真係として来てもらいました。まったく、持つべきものは後輩ですよ」

倉野内はあっけらかんとして笑っている。後輩に教えてもらうのはどうかと思うが、真剣に勉強したのは間違いないのだろう。

重利は、周囲の机から好奇の視線を感じた。普段、課外で生徒と交流を持っていない重利が倉野内と何を話しているのか、と興味を持たれている。

「とにかく、場所を変えようか」

二人を伴い、職員室<sup>とちむな</sup>を出た。

「話してくれるんですか、先生」

廊下を歩いているあいだじゅう、子犬のようにまとわりつきながら、倉野内が訊ねる。

「……約束だからな」

ホオズキは何も言わずについてくる。

ひとけ 人気のない特別棟の第二理科室。ポケットからカギを取り出して施錠を解くと、二人を通してドアを開めた。

「品田先生からどこまで聞いたんだ？」

「先生が大学生の時の話だと」

倉野内が答えた。横でホオズキが「撮影してもいいですか？」とデジタルカメラを見せた。動画を撮って、あとで見直して記事にするのだろう。許可したあとで重利は、倉野内のほうを向いた。

「正確には大学院生のときだ。もう十一年も前になる」

「そうなんですか。えーっと、先生の出身大学院というと」

「そうぶ総武工業大学の大学院で次世代電池の研究をしていた。指導担当は、かいあんよしつぐ貝安善次教授だ」

「えっ？」

反応したのは、カメラを構えていたホオズキだった。倉野内のほうは「誰？」と首をかしげている。

「アオズキンの開発者ですよ」

「うっそ。私たち、すっごいお世話になってるじゃん。夏なんて、あ

れないと外で歩けないし」

「しかし、たしか十年前に行方がわからなくなってしまったんじゃないですか」

ホオズキは重利のほうを見た。

「父親の貝安大吉だいきちさんも機械工学の教授でしたよね。でもたしか、理解されない研究に手を出して学界から追放されて失踪しっそうしたんじゃないですか。親子二代の失踪って騒がれたような」

「よく知っているな。十年前と言えば、君はまだ小学校の低学年だったはずだが」

「その頃から『フラデー』読んでいるんで」

若者向けの科学雑誌の名を、誇らしげな様子でホオズキは口にした。

「なるほどな。……実はその、貝安善次の失踪の直前まで、俺は近くにいたんだ」

「そうだったんですか」

ホオズキは目を丸くした。いつの間にか、倉野内よりも撮影係の後輩のほうの話に興味をひかれていたようだった。

「ということはですね、先生の話はひよつとして」

先輩の威厳いげんを取り戻そうとしているのか、倉野内はメモ帳を取り出してボールペンを構えた。

「その、貝安という教授の失踪に関わることですか？」

「ああ」

重利は腕を組み、天井を見上げる。そして、あの奇妙な旅行について回想をはじめた――。

\*

「あっちいなー、温暖化のない国に行きたいぜ」

貝安善次教授は助手席で、自ら開発した全身冷却スーツ（アオズキン）のフードをかぶりなおした。

「どこなんですか、それは」

「知らねえよ。知らねえけどあるって聞いたぜ」

何を変な冗談を……と、運転席の重利はスマートフォンでメールをチェックしながら思った。ステアリングはひとりでに動いている。自動運転システム、レベル4。どうしても必要なときにのみ人間が操作すればいいだけの乗用車である。

「アオズキンを着てるんだから、暑いことはないでしょう？」

「体は冷えてるよ。だけど、このギラギラした太陽を見るだけで暑くなる。俺は子どもの頃から暑がりなんだ。それを解消するために科学者になつたのに」

貝安教授の専門分野は電池開発である。紙よりも軽量で充電効率の高いカイアン・バッテリーを開発した業績で、学界のみならず産業界でも名を知られた存在だ。

教授をさらに有名にしたのが、カイアン・バッテリーを使用した冷却スーツ「アオズキン」だった。見た目はフード付きの前あきパーカーだが、袖についているダイヤルを回せば好みの温度に体を冷やしてくれるという優れたもので、雨にも強く、室外でも十分機能する。もともと暑がりの教授が自分用に開発したのだが、大手の電化製品会社の知るところとなり、目下、実用化に向けてプロトタイプ品の製作が進んでいる。

しかし、アオズキンの実用化の前には、カイアン・バッテリーの量産化という壁がそびえていた。世界情勢のあおりを受けて、カイアン・バッテリーに必須のコバルトその他のレアメタルが輸入しにくい状況になっているのだ。

静岡県にある鉱山でレアメタル鉱が発見されたという報告しちが研究室に入ったのは、先週のことだった。送られてきたサンプルの成分分析をして、貝安教授は「ひゃひゃっ！」とサルのような笑い声をあげた。その鉱物にはカイアン・バッテリーに必要なレアメタル三種が多量に含まれていることが判明したのだった。

問題はその鉱物がどれだけ埋蔵まいぞうされているのかということだ。レ

アメタルが呼んでるぜ、現地に行くぞ！ 貝安教授は興奮し、重利に同行を求めた。レベル4とはいえ、運転席に座る者には運転免許証が求められる。やっかいなことに貝安教授は免許を持っておらず、遠出の時にはいつもこうして言いなりにできる学生の重利を誘うのだった。

「まったく、なんでこんなクソあちい日に実地調査に行かなきゃいけないんだよ」

自分で言いだしたくせに、文句が多い教授である。

「研究室で論文や雑誌ばかり読んでいるだけじゃダメだ。現場に足を運んでこそ科学者だ——学部生のとき、教授の授業でそう教わった気がしますがどね」

「お前ら学生にはそう言うだろうよ、若いんだから」

「まだ四十二歳ですよ。教授たちのあいだでは若いほうじゃないですか」

「四十三になったよ、もう」

へっ、と面白くなさそうに笑い、教授は窓の外を見る。

「コンビニがあったらアイスでも買っただがなあ」

まきのほら  
牧之原インターチェンジでとうめい東名高速道路を降りてから四十分ほど経っている。町を離れ、田舎の集落をしばらく走っていた。事故防止だろうか、アスファルトが太陽の光を反射してやたらとキラキラし

ている。そして、右も左も、三メートルくらいの高さの細い木が規則正しく並んでいるのだった。

「しばらく続きそうですね、この林」

「林だと？」 貝安教授は重利のほうを向いた。「本気で言ってるのか？ 冗談だとしたら相当つまんねえぞ」

「冗談？ なんのことです？」

「本当に知らねえのかよ。周りのこれ、木じゃねえぞ。キャッサバだよ」

もちろんその農作物の名前は知っていたが、畑に植わってる実物を見たことはなかった。

「水も肥料もあんまりいらぬ、世話いらぬの作物だからな、水はけのいい土さえありや、楽に育てて相当稼げる。茶を飲む文化が廃れてきて、かつての茶畑がキャッサバ畑に代わっているケースが多いんだよ」

「しかし、こんなにキャッサバを育てて、需要はあるんですか」

「昔はタピオカぐらいの利用法しかなかったが、今じゃパンやヌードルへの加工技術が発達してるんだ。小学校のときに給食で食わなかったか？」

「弁当持参の私立だったもので」

へっ、とまた教授は笑った。

「最近の学生は本当に世間知らずだな。科学者ってのは広い目を持たなきゃいけない。社会への貢献度がそのまま、大学の予算につながるんだからな」

「肝に銘じておきます」

「口先だけは丁寧ときてやがる。……おつ、ほら見てみる」

対向車線を大きなクワガタムシのような農作業用車両が、ゆっくり進んでくるところだった。

「なんですか？」

「キヤツサバを掘る作業車だ。だいたい九月からが収穫の時期だつてからな。ひゃーっ、すごいなああのタイヤ！」

作業車のタイヤには登山家が履くアイゼンのような爪が無数についていて、カチャカチャとアスファルトにぶつかる音が窓越しに響いてくる。

「木みたいなキヤツサバをなぎ倒しながら掘るんだから、あれくらいタイヤが必要なんだろう。なんか戦車みたいでカッコいいな」

アスファルトの表面が削れてしまう心配はないのだろうか、重利は思った。

やがてキヤツサバ畑はつき、車は十字路を右へ曲がった。キヤツサバではない農作物（それが何なのか重利にはわからないが）の畑と畑の間に民家がある道に入っていく。その道はどんどん細くなり、

やがて集落の中をくねくねと登っていく坂になった。

「おい、本当にこんな道に行くのかよ」

貝安教授は不安になってきたようだった。重利はカーナビの画面を操作する。

「ナビ通りですよ。この集落を抜けて、峠道とうげみちを抜けて……もうあと四キロくらいですね」

「なんか様子がおかしいぜ。雰囲気きふきが暗いしよ」

左右には木造の、今にもつぶれそうな平屋ばかりが並んでいる。

人の姿は見えない。

と、そのときだった。

車の速度が急に下がったかと思うと、ピーツと聞いたこともない音がして、停車してしまった。

「ん？ どうした？」

シートから身を起こす貝安教授。

「エンジンを確認してください。エンジンを確認してください」

人工音声が繰り返しはじめた。重利は大学から支給されているこの車を何度か利用したことがあるが、こんな音声が流れるのは初めてだった。

サイドブレーキをかけ、外に出てボンネットを開いた。車内の音は止まったが、どこをどう調べればいいのかまったくわからなか

った。

助手席から降りてきた貝安教授もまた、重利の隣で難しそうな顔をしてエンジンを眺めている。

「エンジンの調子が悪いようです」

「それはわかってるんだよ」

重利のほうに教授は視線を投げた。

「遠藤、この車を使う申請を大学に出したのはいつだ？」

「三日前です。教授から日程を教えてください、研究室のPCで」

「俺の名前でだよな？」

「もちろんです。学生のIDじゃ予約できません」

「どの車を誰が使う予定なのかっていうのは、予約サイトで誰でも確認できたよな？」

「はい。それどころか、行先も正確に記載されています。申請された目的以外で使われていないか、すべての車両は厳格に監視されているんです」

ちっ、と貝安教授は舌打ちをした。

「やられたぜ」

「どういうことですか？」

「これだよ」こんこん、とエンジンの脇につながれた銀色の筒を教

授は叩いた。「もともとついてない部品だ。きっと時間が来るとこの筒が電力を横取りしちまうしくみになってるんだろ」

つまり、何者かがタイマーのような仕組みを使って、エンジンが時間通りに止まる仕掛けを作ったというのだ。免許を持っていないとはいえ、工学部の教授だけあつて車の仕組みは理解しているのだ。

「誰がそんなことをするんです？」

「さあな、先月論文をこき下ろした物質研究科の何人かの教授か、手際が悪いことを怒鳴りつけてやった技官の誰かか、あるいは、単位をやらなかった学部生の馬鹿どもか……」

教授は学内に敵が多い。口の悪さが災いしているのは本人も自覚しているはずだが、一向に直そうとしないのだ。

「まあ、とにかくこいつを外してみないことにはわからない。遠藤、ドライバー持ってるか？」

「自分で外すつもりですか？ 救助を呼んだほうがいいのでは」

「時間がかかるだろ。それに俺は工学部の教授だぞ。イタズラされたエンジン一つ直せないようじゃ、恥の上塗りだ」

変に意地っ張りなところがある。きっと犯人は貝安教授のこの性格を見越して、こんな田舎で停まるように仕掛けたのだろうと重利は思った。

「ドライバーなんてありませんよ」

「しょうがねえな。じゃあ、そこらで借りるか」

貝安教授は一番近い民家に近づいていくと、玄関の引き戸を叩いた。

「ごめんください、ごめんください！」

「教授、迷惑ですよ」

重利を振り切り、引き戸に手をかける貝安教授。しかし、鍵がかかっているようで開かない。ちつ、とまた舌打ちをすると、貝安教授は隣の家へ駆けていった。その家の扉も留守のようだ。次の家、次の家、と貝安教授はあきらめずに訪問していく。残暑に文句を言っていたのが嘘のような機敏な動きだった。

「どの家も留守ですね。みんな、農作業に出ているのかもしれないよ」

あきらめさせようと、重利は言った。

「だとしても爺さん婆さんぐらいは留守番していそうなものだろ。

……ん？」

貝安教授は重利の背後に視線をやった。

「どうしたんです？」

「今、その家の陰から男が顔出していたぞ！ こい、遠藤」

貝安教授は有無を言わさずその家の脇の細い道を行く。田舎の集落の細い路地である。複雑な道を行って、戻ってこられなくなった

らどうするつもりだ。重利が不安になったそのとき、視界が突然開けた。

砂利の敷かれた広い空間。さび付いたブランコと鉄棒がある。児童公園だろうと思われた。

「おい遠藤……なんだか視線を感じないか？」

低い声で言うと、貝安教授はあたりを見回す。民家の塀と、茂みがある。その茂みが、不自然にがさがさ揺れはじめた。

「誰か、いるんですか？」

教授が声をかけると、ひよこりとその茂みから、白髪の痩せた男が顔を出した。険しい目つきでこちらを見ている。

「すみません、車が故障してしまったようです……」

貝安教授が彼に一步近づいた瞬間、他の茂みや、塀のあいだから、ぞろぞろと人が出てきて、二人を取り囲んだ。年齢は三十代から七十代くらいまで、男も女もいるが、鍬や包丁やビニール傘など、なんとなく武器になりそうなものを携え、警戒したような雰囲気になっていた。

重利は焦り、貝安教授の顔を見た。悪たれている分、肝は据わっていると見え、怯んでいる様子はない。

「あんた、トモジマさんの仲間じゃないのか？」

初めに顔を出した白髪の男が訊ねてきた。

「トモジマ？ そんな人は知らない」

貝安教授は答え、大学から発行されている身分証明書を見せて、事情を話した。話を聞いているうち、誤解は解け、取り囲む人々はそれぞれの武器を下ろした。

「そういうことだったか。これは悪かった。あんたがそんな青いフード付きの服を着ているもんだから、つい勘違いしてしまった」

そして、傍らの三十代の若者を振りかえり、

「おい佐吉、自治会館にドライバーがあつたら、あれを持ってきてやってくれ」

はい、と若者が去ると、白髪男は急に表情を和ませて二人に近づいてきた。

「この集落の自治会長をしている、間宮だ。御覧の通り閉鎖的などころで、よそ者には警戒心が強くてな」

「お気になさらず」貝安教授は珍しく丁寧な口調を使った。「ところでその、トモジマっていうのは何者です？」

周囲の人々のあいだに再び警戒の糸が張り詰めたように、重利には思えた。震えている者も二、三人いる。どことなく、恐ろしい話を聞くような雰囲気だった。

「この奥の山小屋に住んでいる変人だよ。あんたがたが気にすることじゃない」

「いやあ気になりますよ。これはね、私が開発した『アオズキン』っていう身体冷却スーツなんです。温暖化に歯止めがきかなくて、ここところ年ごとに夏は暑くなっている。そんな日中でもこれを着てフードをかぶりや、ひんやりと快適に外を歩ける。今はまだ軽量電池の性能が悪くて三、四時間しか持ちませんが、そのうち性能も上がって、みんな着るようになりますよ」

間宮はびくりと眉毛を上げた。貝安教授はすかさず言葉を継ぐ。

「そんなアオズキンと同じものを着た人間を、皆さんが怖がると聞いちゃ、興味を持つなってほうが酷こくだと思いませんか」

「間宮さん」

さっきの佐吉という若者が、緑色の鉄の箱を携たずえて戻ってきた。

「他に入用いりようなものがあつたらいけないんで、工具箱ごと持ってきました」

「おお、サンキュー。気が利くね」

ひよいと佐吉の前に出て、貝安教授は工具箱を奪い取った。

「車に戻るぞ遠藤。それから間宮さん、手伝いをお願いしますよ。道々聞かせてください、トモジマのこと」

貝安教授に丸め込まれ、あつけにとられる集落の人々を置いて、間宮はついてくることになった。

「ここいらあたりは代々続く茶の農家だった」

道々、間宮は事情を話しはじめた。

「二十年ぐらい前に静岡の老舗しにせの茶問屋が倒産したことで、めつきり注文が減った。細々とつづけてはいたが、茶の需要量は減る一方。国の補助金なんてスズメの涙で、出て行ってしまいう家も後を絶たなかった。そんな状況が五年も続いたある日だったか、あの男がこの村にやってきたんだ」

「トモジマですね？」

貝安教授の問いに、間宮はうなずいた。

「年齢は私と同じくらい、つまり、当時六十の手前だったろう。集落の坂の途中から、荒れた茶畑を見渡してにやにやしているもんでみんなが気味悪がとつた。だから、私が話しかけたんだ。すると彼は言った。『茶の代わりに、儲もつかる農作物をつくらないか』とな」

「そりゃぶしつけですね。……あ、あれです、俺たちの車」

ボンネットを開けるように重利に命じると、アスファルトの上に置いた工具箱の蓋を貝安教授は開いた。ドライバーを取り出し、エンジンのねじを外し始める。

「間宮さん。どうぞ続けてください。話は作業をしながらでも聞けますんで。俺がうっかり聞き逃しても、遠藤が聞いているんで」

「ああ……」

間宮は重利のほうを向いた。

「どこまで話したかな」

『茶の代わりに儲かる農作物を』というところですよ」

重利が答えると、間宮は続きを話した。

トモジマと名乗った男が提案してきたのは無論、キャッサバの栽培だった。水はけがよく日当たりのいい地形はキャッサバに適しており、これから先、タピオカ以外の食べ方の需要が増えるだろう。特別な肥料も農薬も必要なく、水やりの頻度すらも心配しなくていい。これほど楽に儲かる作物は他にない……とにかくトモジマは甘い言葉を並べ立てたようだ。

「それを信用したんですか？」

重利の問いに、間宮は苦笑交じりにうなずいた。

「怪しいとは思ったさ。だがもう茶での収益は見込めないし、トモジマは格安の後払いで苗木まで調達してきてくれた。眉唾まゆつばの気持ちで育てたら、キャッサバの成長は早くてな、秋には数トンの収穫があり、それがすべて、望外の価格で業者に売れた。茶の損失など三年で取り戻せるくらいの見込みだった。トモジマのアドバイスで、収益の一部をキャッサバ収穫用の機械にあて、次年度は作業効率があがってさらに収益が出たんだ」

それは信じてしまうだろう、と素直に重利は思った。

「まるで救世主のようですね」

「救世主か。そうだな、トモジマはこの集落の救世主だった。この集落だけじゃない。周辺にもキャッサバの栽培は広まっていき、今じゃ牧之原のかつての茶畑の半分がキャッサバ畑に代わっているだろう」

うんうんと、間宮はうなづく。重利の中に疑問が生まれる。

「そんなトモジマという男を、どうして恐れているんですか」

「ああ……何から話していいか」

間宮は顔を曇らせた。

「彼はずいぶんな変わり者だ。キャッサバを育てはじめて二年目から、全自動掃除機をペットにしはじめたんだ」

「ええと、全自動掃除機というのは……」

「ほら、丸くて平べったくて、留守の間に部屋中を動き回ってゴミを吸い取っておいてくれるあれだ」

「それを、ペットに？」

「そうだな。ずいぶん大きかったから古い型なんだと思うが、リードを取り付けてな、夕方の七時ぐらいになると、本当に犬を散歩させるようにして集落や畑の間を歩き回るんだ。人とすれ違うときは『うちのバロだ』なんて、名前を紹介してな」

重利の頭の中に、ずいぶん不可解な映像が浮かぶ。ちよつとやそつとの変人ではない。

「まあ、誰に迷惑めいわくをかけるわけでもないし、突然やってきてキャツサバの栽培なんて進めるようなやつだから変わった趣味もあるだろうと、私たちは放っておくことにしたんだ」

んん、と間宮は咳払いをした。

「それで、最近まではうまくいっていたんだ。ところが、今年の七月のこと。キャツサバ畑沿いの街道で、トモジマが全自動掃除機を抱きかかえて泣き崩れているのを、私の向かいに住む増田という男が見かけた。どうしたんだと増田が声をかけると、『バロが動かなくなってしまった』と、トモジマは訴えた。その日は午前中から四十度を超す暑さでな、もともと室内用に作られた機械をそんな炎天下に引き出せば壊れるのも当たり前だろうと増田が言うと、トモジマは突然奇声をあげて襲い掛かってきたんだそうだ」

増田の顔をひっかき、全自動掃除機のバロを抱えてトモジマは走り出した。集落の人々が見ている中を駆け抜け、山の中のあばら家に飛び込んでいった。

「それから三日しても四日しても出てこなかった。私は心配して食料を携え、若い者二人を連れてトモジマの家を訪れた。声をかけても出てこん。引き戸に手をかけると鍵がかかかっていなかった。それを引き開けると――」

しゅつ、と間宮の歯の間から息が漏れた。何か恐ろしい光景を思

い出しているようだった。

「トモジマは飛び出してきた。目をむき、涎よだれを垂らし、手には鎌かまを持っていた」

「鎌ですって？」

「ああ。若い者の一人がとっさにとびかかったが、その鎌が腕を傷つけて血が飛び散った。止めようとした私にも鎌を振りかざし、『もう俺にかかわるな！』と……青いフードの向こうに見えた目はもう、人のそれではないようだった。鬼だよ、あれは鬼だ」

「ペットの全自動掃除機が壊れたことで、そうなってしまったというのですか？」

「わからんが、そういうことだろう」

「修理を勧めればよかったのでは？」

「勧めたさ。だがやつは『修理』という言葉に過敏かびんに反応してさらに襲い掛かってきた。やつにとってバロは生き物だったのだろうな。

……トモジマは夜な夜な、何かを叫びながら集落の間をさまようようになった。みな、襲われるのを恐れて外に出なくなった。青いフードの男を恐れるのもわかるというものだろうか？」

重利は何も返す言葉がなかった。

「あー、もしもし？ JOFさんですか」

やけにのんきな声をした。車に凭もたれ、貝安教授はスマートフォン

で通話をしている。

「申し訳ない。途中で車が故障して、今日は行けそうにないんです。はい。また日を改めて伺います」

通話を終え、重利のほうを見る。

「やっぱダメだった。バッテリー自体の交換が必要だ。遠藤。故障車援助業者にはもう連絡を入れておいた。ここの正確な位置座標も送ったから、すぐに作業員が来るだろう。ここで待ってて対応してくれ」

「ちよつと待ってください。教授は、どうするんですか？」

「トモジマと話をしてくるよ」

「はっ？」

重利は耳を疑った。

「……何を言つとるんだ？」

間宮もまた、怪訝けげんそうな顔をしている。

「同じアオズキン仲間として、興味があるからな。山のほうってこ

とは、こっちか！」

貝安教授はアオズキンのフードの形を整え、坂の上のほうへ駆け行く。

「おい、あんた！」

間宮も慌てたように追っていった。去り行く二人の後ろ姿を、重

利は見送るだけだった。

\*

「それで……？」

倉野内はメモを取る手を止め、重利の顔を眺めた。

「ものの三十分で、修理の作業員はやってきた。エンジンを見て、『簡単な作業だ』ってすぐ直して帰っていったよ」

「教授はどうなったんです？」

「帰ってこなかった。電話をかけても出ない。そのまま夕方になってしまった。消えてしまった……集落の面々も不思議がっていたよ」  
静岡の見知らぬ集落で担当教授が消えてしまったその不気味さを、十年たった今も重利は忘れることができない。

「あの」何かに思い当たったように、倉野内は人差し指を立てる。

「トモジマの家はどうなんですか。そこまでは覗のぞかなかったんじゃない」  
「覗いたよ」

重利は答えた。

「薄汚い土間の室内は汚れ切っていた。電気がどこにあるかわからず、闇の中を歩きながら教授の名を呼んだ。だが、誰の気配もない。奥の間に入ったとき、俺は何かに蹴つまずいた。それが古い電気ス

タンドだとわかり、スイッチを入れると部屋が照らされた。薄汚れた床に、バラバラに解体された機械があった。全自動掃除機だとすぐに気づいたよ」

「バロですか」

倉野内の問いに、恐らくそうだろうと答え、重利はつづける。

「部屋の奥にふすまがあつて、さらにもう一部屋あるようだった。

俺はふすまを開いた。するとそこに、直径二メートルはあろうかという銀の皿のようなものがあつた。その上に——」

重利は言葉を切る。生徒二人は固唾かたずをのんで次の言葉を待っている。

「アオズキンが二着、あつたんだ」

「二着……」

「一つは袖に見覚えのあるほつれがあつたから、教授のものに間違いない。もう一着は誰のものかわからなかったが、トモジマのものなんだろうな」

重利は搜索をあきらめ、車で大学まで戻った。

「警察には行つたんですか？」

「もちろんだ。しかし、やはり誰も見つからなかった」

重利は口を閉じる。しばらく重苦しい沈黙が支配した。窓の外、日は傾きかけていた。

「すばらしい！」

倉野内は突然、ぱちんと手をたたいた。「なんて素敵な奇談でしょう。まさか遠藤先生からこんな話が聞けるなんて」

「先輩、不謹慎ですよ。実際に警察が動いている事件なんだから、松本先生に止められますよ、きつと」

ホオズキがたしなめるが、倉野内の興奮はやまなかった。

「絶対に押し通す。私はこの話、新聞に載せる！ いいですね、遠藤先生？」

「好きにしたらいい」

どうせもう終わった話だ。重利はあきらめにも似た気持ちになっている。

「これで俺の話は終わりだ」

タイミングよく、チャイムが鳴った。

2、

翌日、職員室にやってきたのは一人だった。

「先生」

重利の側に立ち、理知的な表情で眼鏡に手をやる。

「ん？ 君はたしか……ホオズキ君だったな」

「小月ですが。まあ、ホオズキでけっこうです」

「倉野内はどうした？」

「顧問の松本先生とやりあっています。やっぱり、警察が絡んだ事件ということで貝安教授の話は新聞に載せられないかもしれません」

遠藤は思わず苦笑した。

「それを伝えに来たのか」

「いいえ。ちょっとした情報を持ってきました」

カバンの中から取り出したクリアファイルを、重利の眼前に差し出す。挟まれたコピー用紙にはいくつかのグラフと、「アスファルト混合物の組成」という文字が見え、興味をひかれた。

「僕、トモジマの正体がわかったかもしれませんが」

ホオズキの顔を思わず見る。眼鏡のレンズの向こうの目が、れいり 惻然な光を宿している。

「まあ、全部僕の妄想なんですけど、『神隠し』とかそういうの、信じたくないんで」

どこかで同じことを思っていたからだろう。この男子生徒の妄想とやらを聞いてみたくなった。

「……行こうか」

立ち上がり、職員室の外へ促した。うなが

無言のまま、二人で廊下を歩く。

理科室の昨日の席に座ると、彼はクリアファイルを差し出してきた。ホチキス留めされた、数枚のコピー用紙が挟まれている。細かい文字の羅列られつの中に、専門性を感じさせるグラフや表が配置されている。

「昨日の先生の話の中にあつたトモジマの行為のうち、僕は三つ、気になりました」

重利はクリアファイルを受け取る。

「集落にキャツサバを勧めたこと、全自動掃除機をペットにしていたこと、そしてもちろん、アオズキンらしきものを着用していたこととです」

「レポートでも書くような物言いだな。それよりこれは何の資料なんだ？」

「『マイント重工』という建設会社の資料です。うちの父は建設関係の仕事をしていまして、その関係で手に入れました」

めがねをずりあげ、ホオズキは続けた。

「『マイント重工』はここ半世紀にわたり、道路のアスファルト舗装を主要事業としています。オンラインの新聞記事を調べたところ、貝安教授が失踪したのは牧之原市の北部、藤霧集落かじぎりです。間違いないですね？」

重利は記憶を引っ張り出す。

「ああ、たしかそういう名だった」

「三十年前、その集落の道及び農道を手掛けたのがこの会社なので  
す。さて、先生は「存じ」と思いますが、舗装をする場合、アスファ  
ルトだけではなく砂利や砂を混ぜ、一度『アスファルト混合剤』という  
ものを生成します。土砂類は国内で掘削くわくされたものを使うことが多  
いのですが、藤霧集落の舗装を手掛けた時期、『マイント重工』は中  
国の高速道路の一部の事業を手伝っており、そのとき中国で彫り出  
した土砂を国内のアスファルト舗装にも使用しているんです」

資料にはたしかにそう書いてあった。

「それがどうしたんだ」

「その土砂を掘り出した個所なのですが、後になってコバルトやジ  
プロシウムといったレアメタルが大量に含まれていることがわか  
りました」

なんだって……という言葉を飲みながら重利は、キャツサバ畑の  
中に伸びる道がやけにキラキラしていたのを思い出していた。

「さて、今ここに、コバルトやジプロシウムを欲している人がい  
るとします。おそらくは何か工学的なものを開発している研究者で  
す。その人物は藤霧集落のすさんだ茶畑周辺の道路に宝が眠ってい  
ることを知った。公の機関を通さず、レアメタル類を回収したい。考  
えに考えた末、ある大型機械に思い当たったのです」

「何のことだ？」

「アスファルトを少しずつ削ってくれそうな、ギザギザしたタイヤを持つ車両ですよ」

重利は思わず、あつと言いそうになった。

あの日すれ違った、大きなクワガタのような車両――。

「キヤツサバを掘る農作業車か？」

「そうです。その人物は農家の人々に近づき、キヤツサバを育てるように勧めました」

トモジマのことを言っているのは明らかだった。彼はアスファルトからレアメタルを削り出すために、キヤツサバの導入を勧めたというのだった。

「そんな馬鹿な」

「もう一つ根拠があります。せっかく削り出したレアメタルのかけらを、回収できなければ意味がない。ところが、一つ一つ拾っているは少量ずつしか集められないし、その姿を人に見とがめられてしまします」

「じゃあどうすれば」

と言いかけて重利はまた、はつとする。

「全自動掃除機……」

「そうです。トモジマはレアメタルを回収するため、全自動掃除機

をペットにしたなどと言って、キャツサバ畑のあいだを散歩させたのです」

たしかに、全自動掃除機のバロを散歩させはじめたのは、キャツサバの農作業車を導入したあとだと、間宮は言っていた。

「トモジマはなぜレアメタルを欲しがっていたんだ？ そんなの、専門家しか欲しがらないだろう」

「専門家だったんですよ」

細い顎あごに手をやるホオズキ。

「トモジマの家から見つかったアオズキンは二着とも、本物の冷却スーツだったんですよ？」

「そうだ。まぎれもなく、貝安教授が開発したものだ」

「当時は今みたいにアオズキンは流通しておらず、貝安教授が作った試作品しかなかった、そうですね？」

「そうだ」

「だとしたら考えられることはただ一つ。教授は事前に、トモジマにアオズキンを送っていたんです」

そしてホオズキは決定的な言葉を吐いた。

「自らの開発した電池を使った、優れた冷却スーツ。それを、同じ分野の研究をしていた父親にも見てほしかったんですよ」

「……トモジマは、……貝安教授の失踪した父親、貝安大吉だとい

うのか？」

「その通りです。おそらく貝安教授は朽ち果てた家で、研究を続けていたんでしょう。十分なレアメタルが手に入ったあたりから、集落の人たちを遠ざけるため、狂人になった演技をしたんです」

「ありえない。その、大吉教授が潜伏せんぷくしてた集落で、偶然、エンジンが止まるなど」

「偶然じゃないですよ。エンジンを止める仕組みを仕掛けたのは、貝安教授自身なんですから」

馬鹿な……と言おうとしたが、踏みとどまった。人の運転する車なら、ちょうどいい場所でタイマーを作動させて止めることは不可能だろう。だが、カーナビで目的地が設定された自動運転車なら、あの集落を通過するのがいつなのか予測が可能だ。その時刻に合わせてエンジンが止まるようにタイマーを設定しておけば……

「どこへ行ったんだ？」

重利は喉の奥から絞り出すようにしてホオズキに訊いた。

「貝安教授は、親子でどこへ消えたというんだ？」

「大吉教授が学界から黙殺された理由を、ご存じですか？」

首を振ると、ホオズキはカバンから別のクリアファイルを取り出した。字の細かい論文だが、そのタイトルに重利の目は吸いつけられた。

——『物質転送理論』

「距離の離れた場所に物質を転送する技術か。SFでは昔から描かれているが、そんなのは現実には不可能だろう。この論文だって……」

「読んだんですが、大吉教授が考えたであろう用語がたくさん使われていて、実際どうやればそんな装置を作るのが可能なのか、まったくわかりません」

ホオズキはあきらめたように言った。

「しかしそれは、大吉教授がこの理論を実践する装置を開発できなかった、という証明にもなりません」

ありえない。

ありえないのはわかっているが、重利の目の前に、トモジマの家のふすまの向こうで見た光景がまざまざと浮かんでくる。アオズキンが二着放置されていた、大きな銀色の皿のような装置。

あれは……

「暑がりだった貝安教授もまた、自分を理解してくれない学界に嫌気がさしていたのかもしれない。それでいっそのこと、父と共に涼しいどこかへ行った、というのはどうでしょうか」

アオズキンの必要のない場所へ、ということか。

重利は頭がぐらぐらと揺れていった。そんなことがあるのだろうか。本当に……

「まあ、すべては僕の独りよがりな妄想です。この話は倉野内先輩にはしないでお願いします」

ホオズキは薄く微笑みながら、クリアファイルをカバンにしまう。

「先輩はきつと、こういう類たぐいの怪談は好きじゃないから」

それじゃあ失礼します、とホオズキは理科室を出ていく。

残された重利は、夢の中にもいるような気持ちで、彼の出ていったドアを見ていた。十月が始まったというのにまだ真夏のように暑い。アオズキンを着ているのに、額に、首筋に、背中に、じとっと嫌な汗をかいている。貝安教授の、どこかふざけた顔が、頭の中よみがえってきた。

——あっちいなー、温暖化のない国に行きたいぜ

(終)